

中曽根康弘氏講話要録

2009年3月13日に中曽根康弘元総理に講話を行って頂きました。その要約は以下の通りです。

「要約」

- (1) オバマ政権下の国際関係、昨秋来の世界金融恐慌、国際舞台における新興勢力の台頭、生命の尊厳から出発した戦争や紛争のない国際社会の構築の提言など国際政治・外交。
- (2) 解散・総選挙が予測される現在の国内政局と、選挙後の展望、国家的危機にいかに対処すべきか、そして不況下における困窮者に温かい政治の重要性などの国内政治。
- (3) 終戦後に中曽根氏が政治の道を歩まれ、原子力平和利用の科学技術基本法の制定に取り組まれたこと、総理時代に各国の首脳と交流を深めたこと、ご自身の経験から坐禅の勧めなど。

1. 国際外交

「オバマ政権下の国際関係」

ブッシュ大統領の行ったイラク戦争は、今年の6月30日に米軍はイラクの都市から撤退をし、7月30日にはイラクの国民投票が行われます。アメリカのイラクにおける軍事行動は一応終わりを告げて、オバマ新大統領が出て来て、今までの一国主義というユニラテリズムのやり方に対して、多極多元あるいは国際主義という方向にアメリカの政策は変わると思っています。ブッシュ大統領の時代には、2001年にニューヨークのアルカイダのテロの大災害がありました。これが大きな転機で、それ以後のブッシュ政権の政策は、米国の一国主義、あるいは米国のいう自由民主主義が世界的にセットされることが強く主張されました。オバマ大統領の最初のスピーチ等を聞きますと、変わりつつありますが現実にそうなるかどうかは分かりません。そういう方向にアメリカとともに政策を進めていきたいというのが我々の考えであります。

「ブッシュ政権と小泉政権」

ブッシュ政権の影響を受けたのは小泉元総理であって、小さな政府とか規制緩和とか、郵政や郵便局の金融機構の規制解除、民営化というような方向に持っていきました。これはいい方向であったと思いますが、現実の実行段階にはいるといろいろな問題が出て来ています。アメリカのブッシュ大統領に影響を受けた小泉元総理の政策が、今部分的に齟齬をきたして、批判を受け始めています。小泉政治の一つの大きな功績は、90年代から2000年にかけて

ての日本の漂流を止め、5年間政権を安定させたことです。しかし、その後、安倍内閣、福田内閣ができましたが、大体1年ぐらいで終わり、そして終わり際がみんな潔しとしない終わり方でありました。政治に対する信頼が非常に衰え、その後、麻生政権ができましたが、似たりよったりの状況であり、それで選挙を迎えるという状況になっています。

「世界金融恐慌」

今、第二の問題はサブプライム不況で、これによって米ドルの地位が著しく低下して、また米国自身の地位も低下しているのは見ての通りです。それと同時に金融・証券資本主義については、サブプライムの問題を見ると、証券が入って来て、転売されたりいろいろして、無責任な状態になり、それが間違いの元でありました。また、金融証券資本主義に対する点検や監視、あるいは新しい規制、こういうものが必要とされてきました。アメリカ流の自由資本主義、自由放任主義というものが各国独自に修正されつつありますが、日本も同じように修正するべきものは修正し、規制すべきものは規制して、何もアメリカの言う通りにやる必要はありません。これがサブプライム問題に対する現在の感覚であります。

「新興勢力の台頭」

三番目の問題は、今まではG8という八つの強国がサミットで世界をリードしてきました。しかし、最近の情勢を見ますと、G8だけでは世界は動かず、同時に発展途上国を呼んで一緒に話をするという状況になっており、G8からG20まで拡大されつつあります。それと同時に国連の無力さが現実的に見せつけられてきています。特に、発展途上国の有力国の台頭というものが目につく状況であります。6月にロシアでブリックス首脳会議とうものが行われます。ブラジル、ロシア、インド、中国という国々が世界政治の中で顔を出し、発言権を回復してきているということです。東アジアにおきましては共同体を作ろうというものがアセアンを中心にありまして、そこに日本、中国、韓国が呼ばれて一緒に協議をして、E13が一つの塊を作っています。これに対して、これだけでは足りない、オーストラリア、ニュージーランド、インドの三つを加えて、この16の国々が東アジア協力体として話し合いをするようになってきています。世界がみんな地域主義で、地域の主体性を要求するようになってきている状況で、我々としては注意してやっていく必要があります。

「生命の尊厳から出発した外交を」

オバマ大統領の時代に入って来て、世界は平穏になって来ています。もちろん地域紛争は各地にあります。武力に訴えるということが少なくなって来ています。生命の尊厳という意識が21世紀になってかなり強くなっている影響を我々は看過することはできません。生命の尊厳性のところから出発して、その精神性、あるいは一つの主唱というものを持って世界平和を推進していることを、日本が外交の一つの基軸として強く持っていることが適当であると思います。

2. 国内政治

「現在の国内政局」

日本の政局の問題であります。解散の時期と次期政権については簡単に言える問題ではありません。これからの日程を見てみますと、9月10日に現在の衆議院議員の任期が満了し、9月30日に麻生首相の任期が満了します。6月3日が国会の会期末です。さらに7月12日に東京都議会議員の選挙があり、7月8日にイタリアでサミットがあります。こういう中で、政府はいつ解散をやるかという選択権を持っており、それが政治の内面的な中心課題になっています。私の大胆な予測を申し上げますと、6月3日が会期末ですから、国会開会中まではどうにか予算関連法案を衆議院、参議院で通さなければなりませんので、6月3日までに解散することはやや難しい気がします。7月の東京都議会議員選挙とかイタリアサミットを見ますと、6月中に解散を断行し選挙を行うことが一つのチョイスです。それをやるにはかなり勇断を振るった総理でないとなかなか難しいと思います。

「総選挙後の展望」

解散した場合にどのような結果が生まれるかという点を見ますと、共同通信の3月9日の世論調査を見ますと、自民・民主の大連立というものが25.9%、それから民主中心の自民を入れた連立が22.4%、自民中心の連立が19.7%。つまり国民は両方が弱気な情勢で、あえて積極的に選択するものではないという意識もあって、結局大連立という発想を知識人はある程度持っているのではないのでしょうか。それによって、国論を統一し政策を統一して、政治の運営、運行を、障害をなくしていくように行うことが賢明だという判断もあると思います。選挙後には第一党が政権をとることが憲政の常道といわれています。しかし、他の会派も入れた多数、第一党のみならず多数党という面を見ますと、民主の場合には社民を入れる以外にはありませんが、そうなるとかなり政策的に無理があります。社民と民主の保守派とは非常に大きく違いますが、民主の保守派は自民党とほとんど違いはありません。自民党より右の人たちがかかりいます。民主政権は、単独で多数をとった場合でも、社民を入れなければ強力な政権にはならないと思います。日本の政治は非常に厳しい情勢にあります。今の日本の政局は弱く、何時どういうふうにも崩れて第三党ができるか分からない情勢が出てくる可能性があります。そういう面から見て、日本の政治状況自体というものが非常に危機的な状況にあると私は依然思います。

「国家的危機での対処法」

こういう危機のときに大事な事は、一番目に政治の歴史の点検が非常に重要です。政治のそのときの目標を明確に再確認して国民に示すということと、立党の原点に帰ることは非常に重要なことです。そして、いかにして民族的なエネルギーを引き起こす力を政治が作っていくかが党派を越えた課題になります。それと同時に外交において大事なことは、まず実力以上の事を国家はやってはいけません。二番目は戦争という大問題はギャンブルでやってはい

けません。第三は内政と外交を混交してはなりません。そして四番目は、国際的潮流に乗らなければなりません。大東亜戦争は明らかに国際的潮流からはずれた戦争であり政治行動でした。この四つの外交原則が大東亜戦争を経験した私の結論です。

「困窮者に温かい政治を」

こういう危機の時の政治にあつては、一番大事な事は庶民階級、困窮者の生活の面倒を本当に丁寧に見ながら政策を断行することが大事です。困窮者に常に焦点を当てた温かい政治を行いながら、そして革新を断行していくことが現代の政治家の目標です。戦後政治は新しい転換期に入って来ており、いくつかが変わって来ています。自民党の内閣時代、90年代の漂流時代、それから小泉元総理が5年間ストップさせた時代、そして現在の漂流的に動いている時代。そういう情勢を見ますと日本の政治に何か足りないものがあります。この貧困の中にどうしてこの日本の政治を再生させていくかと、国民の力を借りて、そういう力を生み出す以外に実際にはないのです。それは我々の課題と思っています。

3. 私の政治の志

「終戦をむかえて」

私は内務省に入っておりましたが、戦争に行つて負けて復員して、内務省を辞めて政治家になりました。政治家になったときに、戦前の大物の文化人で、近世日本国民史という本を書き、文化勲章をもらった徳富蘇峰氏に会いました。私は日本の歴史をどう思うか、東條内閣や戦争内閣、日本の戦争行為、今度の大東亜戦争をどう思うか、アメリカや中国の関係をこれからどうするかという話を聞きに行きました。おそらくこれが分かればGHQに睨まれたと思います。我々の仲間東大法学部を出て高文に受かった連中が元の省に復帰して、各省の若手で海軍の主計をやった連中が集まって、日本をどうするかという会を作りました。その会の面倒を見てくれたのは五島昇君でした。その時の仲間が通産省では赤澤璋一君、大蔵省では吉国二郎君、農林水産省では桧垣徳太郎君等であり、彼らを同志として日本の前途を心配する会を始めた訳です。

「原子力平和利用」

GHQが仁科さんの研究所のサイクロトロンを品川の沖に捨てました。仁科さんが一所懸命に使ったサイクロトロンは平和利用のもので、原爆を作るものではありませんでした。私は憤りを感じて、それが原子力を、科学技術をやろうという動機になりました。昭和26年に私はアメリカのハーバード大学のキッシンジャーの上と呼ばれて渡米し、アメリカを見て回りました。そしてアメリカの情勢が原子力平和利用に転換したという情報を聞きました。帰りにバークレーのローレンス研究所に立ち寄り、そこにいた理化学研究所の嵯峨根遼吉（さがねりょうきち）博士と懇談し、日本の原子力平和利用研究をどのようにしたらよいかという助言を求めました。博士は、第一に長期的国策の確立、第二に法律と予算をもって国家の意思を明確にし、安定的研究の保証、そして第三に、このような方法で第一級の学者を集め

ると、これら三点を指摘されました。

それで昭和29年、2億3千5百万円の予算の原子力平和利用の中期シナリオを突如出して、あれよあれよという間に通してしまいました。そうしますと新聞から、中曽根が原爆を作るのだと、日本を再びまた魔の世界に戻すのだと徹底的にやられました。しかし、我々は自民党の中もしっかりと掌握しながら推進し、科学技術庁を作って、基本法を作って、そして科学技術の体系、将来構図を学者に作らせました。そういう事を昭和31年から32年にかけて行いました。あの頃は政治家がそういう風に思い切って仕事をやれました。私は、議員立法で原子力体系を作りましたが、田中角栄氏は高速道路基本法というのを作りました。あの頃はまさに自由闊達に動けました。今は、沈黙社会になってしまったので、よっぽど卓越した政治家が出てこない、あの頃のような事はできません。

「卓越した政治家の風格」

今の政治家は、二世、三世になって来ますと、そうした度胸もないし、あれた魂もないです。我々は戦争から帰って来て、必死になって日本をどういうふうにも再建するかと、命がけでそれをやって来ました。そういうことで日本の曙というか、体制ができた訳です。また、政治家というものの器量を見ました。それは国会の廊下で先輩の偉い政治家とすれ違い、風圧を感じる政治家がいて、それが吉田茂元総理でありました。我々は青年代議士で、むこうは内閣総理大臣、我々は野党だから会ってもお辞儀はしませんでした。風圧を感じました。それだけのものが政治家の器量に備わってきて、そこまで行った者が総理大臣になるのだということを感じました。だから単なる知識を持つだけではなく、そういう行動とか勉強とか知識とかが積み重なる上で、人格とかが出てきて、何か発散するものがあります。そういうものが実は政治にとって大事なものであると思いました。

「真の外交とは」

外交という問題は外務省だけがやる問題ではありません。それは総理大臣と大統領が行うものです。二人の信頼関係が国家と国家の結びつきを作っていきます。外務省が事務的に行ったものは直ぐ壊されます。私はそういう信念を持って、韓国は全斗煥大統領、アメリカはレーガン大統領、中国は胡耀首相、これらのトップと本当の友人になり、友情を交換しました。決して裏切らず、むしろこっちで多少不利になることがあっても、相手の為になることなら両方を行う。そこまで行かないと本当の意味での国家と国家との関係はうまくいきません。胡耀邦氏は途中で失脚して追放されました。去年は胡耀邦氏の生誕90周年記念式典が生まれ故郷で行われました。私は胡耀邦氏の故郷に行って奥さんや家族に会うことを希望しましたが、中国政府は難色を示してきました。そこで、私は90本の桜の木を贈りました。今は大きく育って桜の花を咲かせているということです。そういうことが中国人の心に映る、桜の木が慰めてくれたのだと、やっぱり外国人にしてもそういう友情を貫く人間でないと駄目です。私は縁を大事にする哲学を持っています。縁を結び、縁を尊び、縁に従う、結縁、尊縁、随縁というものです。中曽根という家に生まれたのもみな縁。その縁の続きで大学も出

て、社会も出て、国家自体がそういう人間の縁の集積でできています。文化も国民の縁の集積、集合体です。そういう意味で、縁を大事にするすることが私の一つの帰結になっています。

「坐禅の勧め」

最近坐禅をやっています。禅を行うことは皆様にとっても大事なことです。心ある人はやってみたらいいでしょう。これは言葉で聞いてみただけでは駄目です。結局これは生きていくということを見極めること、それができるのです。見極めてどうなるのかといいますと、その先は言えるものではありませんが、生きていくということを見極めたいということを行うのです。坐禅堂に座って精を出して、そして、お尻の下に三千尺の井戸があり、そこから空気を背骨を通して吸い上げます。それをまた下にプッシュバックします。それをやっているうちに、初めは意識がいろいろありますが、30分もやれば意識は段々なくなるし、疲れてくると意識もなくなります。そういうのを何回もやってみて、何か感ずるものが出てきます。私は政治家として正念を持つこと、あるいは自分の信念で生きて行くこと、そういう修行や、戦争に行った体験、いろいろな複雑なものの合成としての今日の私があります。一番大事なことは志を失わないこと、その志を常に持って、あらゆる手段を通じてその志を實踐していくことです。私がそういう気持ちに徹底して、一貫してきていることを皆様にご理解いただき今日は終わりにします。ご清聴ありがとうございました。